

令和7年度(2025年度)事業計画

事業概要

当法人は、昭和57年(1982年)に青少年の研修・体験の場として「青少年の家キャンピング指月林」を開設し、ほどなく繊維染色研究所を併設しております。

指月林での活動は、キャンピングや茶道等を通じて青少年に淳風美俗の心(道德心のあ
る情操豊かな心)を養ってもらわんとし、淳風美俗育成事業と称しています。

限られた施設ながら、京都市右京区という地の利と43年の歴史に支えられて、スカウト
活動、野外体験、大学サークル、児童館など幅広い団体の青少年に活動していただい
ております。

一方、研究所の活動は、繊維や染色、色彩の学術的な追及を目指して学術研究事業と称
しており、40年にわたり研究を行っています。

研究成果をまとめた「論文集葆光」は、昨年度で36号を数えました。

この公益目的二事業は、時代の変化を考慮しつつ変わらぬ基本方針で本年度も取り組ん
でまいります。

公益目的事業を支えるべき収益事業は、不動産賃貸管理及び不動産賃貸を行っており、
本年度も公益目的事業に資するという限定目標を維持して継続いたします。

I. 公益目的事業の計画概要

1. 淳風美俗育成事業

指月林敷地内にある研修棟、キャンプ場、グラウンドや染料植物園を活用し、六つのプ
ラグラムにより、淳風美俗の心の醸成とともに、青少年が社会生活を営む上での普遍的な
規範を自ら学び取ることを働きかけております。

また、3年前よりSDGsの目標12である「つくる責任、つかう責任」と「エシカル消
費」について青少年の自己啓発を促すことに努めており、本年度も注力いたします。

個別のプログラムの活動計画は次のとおりです。

① キャンピング研修

キャンピングは、現代の普段の生活とは異なる、不自由な環境の中で行う活動です。「自
然の中での集団による活動・共同生活」を意識してもらうための環境を整えております。

事前準備、鉋による薪割り、新聞や剪定した枝葉などの、自身で工夫した焚き付けによ
る火起こし、カマドでの野外調理、テント宿泊、後片付けなどにおけるグループでの協力

をメインテーマとし、天候の変化、道具器具の活用、危険察知・回避などにも意識が向くよう心掛けております。年 30 日の活動を想定しています。

② 瞑想研修

来場者全員の参加を得るように努めています。

多くの体験者がその効果を実感され、気持ちの整理に役立つという感想も寄せられています。また、この時間を楽しみにするというリピーターも増えています。初参加の方には、瞑想のもつ効果の説明とともに、体験者の感想も伝えるなど実施前の講話に工夫し、瞑想体験への円滑な流れができるよう配慮して、瞑想の習慣化を働きかけます。

③ 茶道研修

「茶の湯や所作、作法を通じて、広く日本の文化に触れる」という目的を踏まえ、参加者の要望、年齢、経験に応じて、内容も難易度も柔軟に対応いたします。

おもてなしの心を体感していただき、茶道への興味を引き出すことが目標です。

年 6 回の実施を計画しております。

④ 作務研修

「務め(つとめ)を作(なす)」。前に来た人が自分たちのために何をしてくれたのか、後に来る人のために自分たちに何ができるのか、という連鎖を強く意識して作業にあたっていただくよう促します。「来た時よりも美しくした」「次の人のためにきれいにした」という達成感を感じてもらうことが、この研修の成果と考えています。

全員参加を目指します。

⑤ 草木染研修

四季を通して実施しています。時期によっては当施設の染料植物園にて植栽している植物の観察、摘み取り、煮出し、染色までを一貫して体験できるなど、指月林の環境を生かした草木染体験を提供しています。

天然の植物より得られる染めの奥深い世界を体験していただくことで、受け継がれる伝統文化の一端を知り、化学染色とは違う、幹、枝、葉、花、根など完全に循環できる素材のみを使用していることを実感いただけます。

指導員は研修の充実を図り、様々な素材、方法、色の染色を実施できるよう研鑽を積んでいます。

12 回の活動を予定しております。

⑥ スポーツ研修

子供の体力低下が問題視されるなか、公園などでのボール使用禁止など子供の遊び場となる場所が減り続けています。特に、9 歳から 12 歳が運動能力向上のゴールデンエイジとされ、また、4 歳から 12 歳までの遊びや運動の体験によって運動能力が決まるともいわれ

ています。その年齢層が安全に活動できるよう芝グラウンドの整備に努めており、子供たちの運動能力向上に繋がることを目標としております。

年 15 回の活動を目指します。

2. 学術研究事業

例年通り繊維染色に関する研究と染料植物園での染料植物の植栽を行います。

繊維染色に関する研究は、年 3 回開催する繊維染色委員会において、研究テーマや研究内容の協議、意見交換等を行って進めております。その研究成果を公表する「論文集 葆光」は、第 37 号の発刊（令和 8 年 3 月）を計画しています。

染料植物園では、天然染料の材料となる樹木の維持管理、草花系及び野菜・根菜系植物の植栽とその収穫を行っております。収穫した染材は研究や草木染研修のために、その保存を着実に進めてまいります。

(1) 繊維染色研究に関する研究

— 本年度の研究テーマ —

①ケラチン繊維の酸性染料染色におよぼす表面および内部荷電の影響

②植物染料染色における媒染条件の一考察

— 先媒染による発色効果について —

③藍における染料と顔料の違いによる色彩（その 1）

④藍における染料と顔料の違いによる心理効果（その 2）

① 羊毛や毛髪に代表されるケラチン繊維の染色には酸性染料が用いられる。ケラチン繊維は複雑な固有の階層構造を有しており、繊維表面層を構成しているキューティクル細胞層は染料浸透におけるバリアーとしての役割を果たしている。それ故に、キューティクル細胞層が損傷を受けると染着量が増大することから、羊毛繊維の損傷度試験に酸性染料や塩基性染料が使用されてきた。この染着量の増大機構については、主に損傷にともない染着有効領域が増大したためと解釈されてきており、損傷にともない変化する繊維表面および内部での染着座席周辺の微環境の変化の影響については十分な議論がなされていない。そこで、本研究では、被染試料に白髪毛髪を取り上げ、還元・酸化処理により損傷させた白髪毛髪に対する分子量の異なる酸性染料の染着挙動を検討することから、酸性染料の染着に対する繊維表面および繊維内部での荷電状態の影響について考察することとした。

② 通常、植物染料染色においては金属媒染により色素-金属の錯体を生成させることで多色の発色並びに堅牢度の向上も得られることが周知されている。

媒染には先媒染、中媒染そして後媒染の3つがあり、一般には後媒染が多用され常温で処理されることが多い。先媒染は代表的な茜や紅花、コチニール、ラックなど赤色系の発色の染料に使用されるが、フラボノール色素をもつ黄色系の発色が得られる染料の多くは後媒染で行われており、染料と媒染方法の振り分けについてはこれまで明記されていない。昨年、著者の「花梨」の研究結果から花梨の色素はフラボノイドの1種と類推でき、先媒染と後媒染染色では先媒染の方が絹布色目は明瞭となり、発色には媒染時の温度および染色温度が影響していることが明らかになった。

この先媒染の結果から、これまで後媒染法が用いられてきた染料においても先媒染を試してみることは大変興味深い。とくに後媒染では金属溶液のpHが一般に低く各金属溶液をpH5以上に調製する手間がかかること、また1回の媒染では淡色ゆえに何度も媒染と染色を重ね色目を深くする操作も必要となり染色に時間を要するため、このようなマイナス面を少しでも解消し染色布の発色が得られることは将来の植物染料の染色利用が広がる可能性にも繋がる。

本研究では、昨年使用した「花梨」を用いて後媒染の条件を改めて染色を行い先媒染のデータとの違いを確認後、今まで後媒染法が使用されてきた「楊梅」(ヤマモモ)、「刈安」(カリヤス)などを使用し、先媒染条件での染色を通して新たな知見を得たいと考えている。

③ 2024年度に引き続き、染料と顔料の違いに関する視点に基づいた研究を実施する。

2025年度は、クロムイエローではなく藍(インディゴ)を用いて検討する。

藍による染料としての染色では、一般的な染色法である建て染めによって、合成インディゴと天然藍としての印度藍の2種を用いて染色する。また、インジカンの加水分解によって生じたインドキシルを繊維内部に吸着させた後に酸化によって水不溶性の色素を生成させる生葉染めをインドアイ乾燥葉の粉碎物を用いて染色する。それらに対して、藍による顔料としての染色では、合成インディゴと天然藍としての藍棒または印度藍を用いて、豆汁や合成樹脂などを固着剤として、浸染による染色を行う。いずれも綿、絹、ナイロン、ジアセテートの各繊維に対して濃淡が異なる複数の染色物を染色して、染料と顔料の発色の違いを分光反射率および色彩値、マイクロスコープでの拡大観察などの機器分析によって明らかにする。

④ 顔料と染料の違いによって織物の風合いが変わるのでないかと考えた。2024年度は、クロムイエローの鉱物染料的染色と顔料の染色の違いによって心理効果に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。ここでは、感覚器官を分けることによって織物から得られる情報が異なることを見出した。

2025年度は、2024年度の方法を引き継ぎ、試料を藍(インディゴ)を用いて検討することにした。織物に対する風合いは、主に織物を手触りすることにより得られる感覚である。しかしながら、実際の風合いは、織物を見ることによっても得られる。ある織物に対する風合いは、織物を見ることによる風合い、手触りすることによる風合い、見て手触りする

ことによる風合いなど様々あり、織物から得る情報によって微妙に風合いが変化する。この感覚の変化は、顔料や染料の浸透の差違が風合いの趣が変化させるのではないかと考えた。

本研究では、藍の染料と顔料の違いによって風合いがどのように異なるのか、感覚器官からの情報を変えて検討することを目的とする。具体的には、手触りによる判定（以後F判定と呼ぶ）、見ることによる判定（以後L判定と呼ぶ）、見て手触りによる判定（以後F&L判定と呼ぶ）の三方法を用いて染めた試料の風合いを比較する。

（２）染料植物園

樹木エリアと畑エリアに区分し、それぞれで天然染料となる植物を採取して学術研究や草木染研修に活用しています。

樹木エリアでは、染材となる樹木を充実させることを目指します。保有する詳細な樹木地図と樹木台帳を活用し、計画的に伐採、剪定、植栽、補植等の管理を行います。また、染料植物には名板や樹木プレートを設置しており、オリエンテーリングなどにも活用いたします。

畑エリアでは、予め年間の栽培計画を作成します。季節に応じた草花系、根菜系の染料植物を栽培し、収穫した葉、花卉、根などを染材として保存します。

Ⅱ. 収益事業の計画概要

例年どおりの水準にて推移し、公益目的事業に対応する収益は継続して確保できる見込みです。

1. 不動産賃貸管理事業

管理物件数の見込	事業用建物	4棟
----------	-------	----

2. 不動産賃貸事業

賃貸物件数の見込	事業用土地	2件
----------	-------	----

以上